

情報社会論 #10

Copyright

青山学院大学 地球社会共生学部

古橋 大地

@mapconcierge



本コンテンツの
ライセンスは特に断りのない限り
CC BY-SA 4.0 に従います。



#先週の課題

GitHubを用いて、

新規に公開リポジトリを作成し、
そのリポジトリのソフトウェアライセンスを、
MIT Licenseとして設定。

CODEとして

<https://github.com/mapconciierge/slcmd>
を参考に **slcmd.bash ファイル**を作成。
リポジトリのPermalinkを

Twitterに投稿してください。

#AGU情報社会論 のハッシュタグを含めてください。

おまけ

sl -a



This repository

Search

Pull requests

Issues

Marketplace

Gist



mtoyoda / sl

Watch 52

Star 796

Fork 167

Code

Issues 5

Pull requests 7

Projects 0

Wiki

Insights

Branch: master

sl / README.md

Find file

Copy path

dkhamsing Demo

556a848 on 20 Mar 2015

4 contributors



10 lines (7 sloc) | 297 Bytes

Raw

Blame

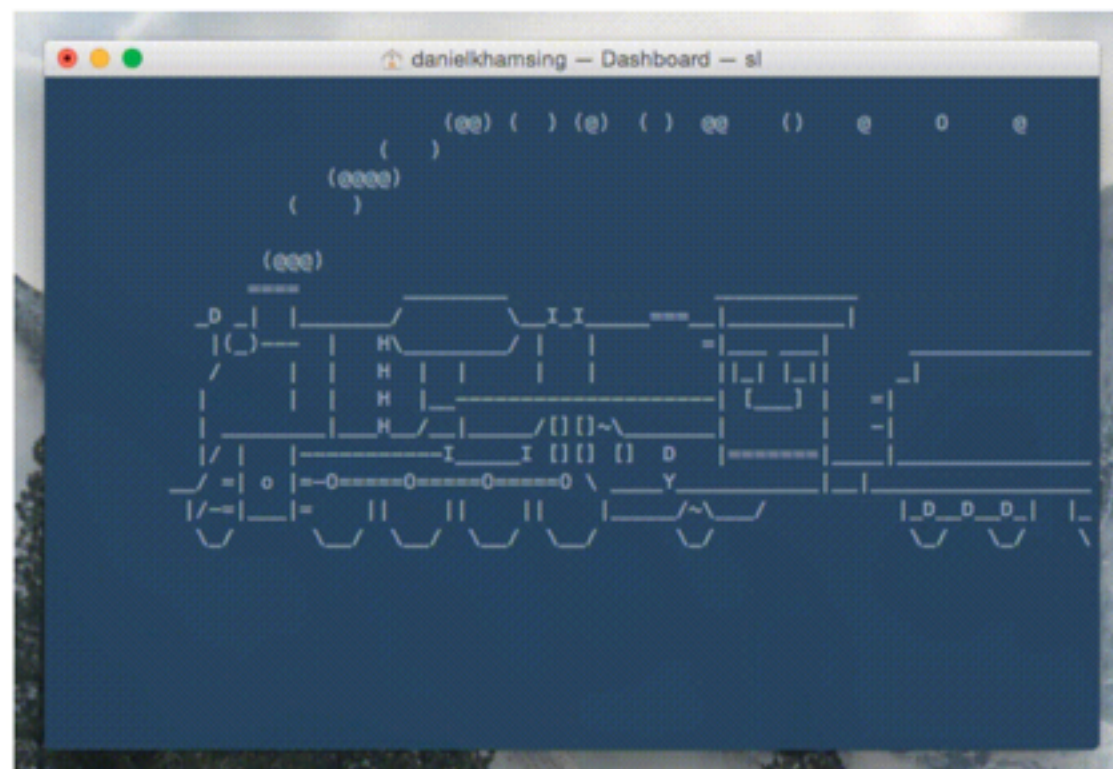
History



SL(1): Cure your bad habit of mistyping


SL (Steam Locomotive) runs across your terminal when you type "sl" as you meant to type "ls". It's just a joke command, and not useful at all.

Copyright 1993,1998,2014 Toyoda Masashi (mtoyoda@acm.org)



<https://github.com/mtoyoda/sl>

ライセンスは？

 iiSeymour fix #5 version and copyright bump.

02e8680 on 31 Mar 2014

2 contributors



7 lines (5 sloc) | 334 Bytes

Raw

Blame

History



```
1 Copyright 1993,1998,2014 Toyoda Masashi (mtoyoda@acm.org)
2
3 Everyone is permitted to do anything on this program including copying,
4 modifying, and improving, unless you try to pretend that you wrote it.
5 i.e., the above copyright notice has to appear in all copies.
6 THE AUTHOR DISCLAIMS ANY RESPONSIBILITY WITH REGARD TO THIS SOFTWARE.
```



<https://github.com/mtoyoda/sl/blob/master/LICENSE>

実質CC BY的オレオレライセンス。

今日のテーマ

ソフトウェアの
ライセンスを
理解する

互換性

Add a license: **None** ▼ ⓘ

Licenses ✕

Filter licenses...

None
Apache License 2.0
GNU General Public License v3.0
MIT License
BSD 2-clause "Simplified" License
BSD 3-clause "New" or "Revised" License
Eclipse Public License 1.0
GNU Affero General Public License v3.0
GNU General Public License v2.0
GNU Lesser General Public License v2.1
GNU Lesser General Public License v3.0



GitHubのデフォルト

- None
- Apache License 2.0
- GNU General Public License v3.0
- MIT License

None

None

= Copyright

Apache License 2.0

Apache License

Apache License（アパッチ・ライセンス）は、[Apacheソフトウェア財団](#)（ASF）によるソフトウェア向け[ライセンス](#)規定。1.1以前は、**Apache Software License**（ASL）と称していた。[著作権](#)表示と免責事項表示の保持を求めている。1.1以降のバージョンは[Open Source Initiative](#)が[オープンソースライセンス](#)と承認している。[GNUプロジェクト](#)は、1.1以前のバージョンを[GPL](#)非互換で非[コピーレフト](#)の[フリーソフトウェアライセンス](#)、バージョン2.0を[GPLバージョン3](#)互換（[GPL2](#)以前とは非互換）の[フリーソフトウェアライセンス](#)と判断している。ソースコードは[フリーソフトウェア](#)や[オープンソースプロジェクト](#)での開発にも使え、[プロプライエタリ・ソフトウェア](#)や[クローズドソース](#)の開発にも使える。[BSDライセンス](#)をベースに作成された[BSDスタイルのライセンス](#)の一つである。

ASFやそのサブプロジェクトが作成するソフトウェアは、すべてApache Licenseで提供されている。ASF以外のソフトウェアでもApache Licenseを使っているものがある。2010年6月現在、[SourceForge.net](#)にある5000以上のASF以外のプロジェクトがApache Licenseでリリースされている^[6]。

目次 [非表示]

- 1 [改版履歴](#)
- 2 [ライセンス条件](#)
- 3 [GPLとの互換性](#)
- 4 [関連項目](#)
- 5 [脚注](#)
- 6 [外部リンク](#)

改版履歴 [編集]

Apache Software License 1.0が最初の版であり、[Apache HTTP Server 1.2](#)な

Apache License



Apacheソフトウェア財団のロゴ

作者	Apacheソフトウェア財団
バージョン	2.0
公開元	Apache Software Foundation
リリース日	2004年1月
DFSGとの適合性	Yes ^[1]
フリーソフトウェア	Yes ^[2]
OSIの承認	Yes ^[3]
GPLとの適合性	Yes（バージョン2.0は GPL v3 と適合する ^[2] が、1.0と1.1は適合しない ^[4] ）
コピーレフト	No
コピーフリー （英語版）	No ^[5]
異種ライセンスコードからのリンク	Yes
ウェブサイト	www.apache.org/licenses 🔗

[テンプレートを表示](#)

- GPL v3.0 互換
- ソースコードはフリーソフトウェア
やオープンソースプロジェクトでの開
発にも使え、プロプライエタリ・ソフ
トウェアやクローズドソースの開発に
も使える。
- BSDライセンスがベース
- コピーレフトではない

GNU

General Public

License v3.0

GNU

General **P**ublic

License **v3.0**

GNU General Public License

「GPL」はこの項目へ転送されています。その他の用法については「[GPL \(曖昧さ回避\)](#)」をご覧ください。



この記事には複数の問題があります。[改善](#)や[ノートページ](#)での議論にご協力ください。

- [独自研究](#)が含まれているおそれがあります。（2012年1月）
- [あまり重要でない事項](#)が過剰に含まれているおそれがあり、[整理](#)が求められています。（2012年1月）

GNU General Public License(GNU GPLもしくは単にGPLとも)とは、[GNUプロジェクト](#)のためにリチャード・ストールマンにより作成されたフリーソフトウェアライセンスである。[八田真行](#)の日本語訳ではGNU一般公衆利用許諾書と呼んでいる^[6]。

[目次](#) [\[表示\]](#)

概要 [\[編集\]](#)

GPLは、プログラム（日本国著作権法では[プログラムの著作物](#)）の複製物を所持している者に対し、概ね以下のことを許諾するライセンスである。

1. プログラムの実行^[注釈 1]
2. プログラムの動作を調べ、それを改変すること（ソースコードへのアクセスは、その前提になる）
3. 複製物の再頒布
4. プログラムを改良し、改良を公衆にリリースする権利（ソースコードへのアクセスは、その前提になる）

GPLは[二次的著作物](#)についても上記4点の権利を保護しようとする。この仕組みは[コピーレフト](#)と呼ばれ、GPLでライセンスされた著作物は、その二次的著作物に関してもGPLでライセンスされなければならない。これは[BSDライセンス](#)をはじめとする[緩やかなフリーソフトウェアライセンス](#)（[英語版](#)）が、二次的著作物を独占的なものとして再頒布することを許しているのとは対照的である。GPLはコピーレフトの[ソフトウェアライセンス](#)としては初めてのものであり、そのもっとも代表的なものである^[7]。

GPLは[フリーソフトウェア財団](#)(Free Software Foundation。以下FSFと略称)によって公開され、その管理が行われている。

FSFが公開、管理する他のライセンスには、[GNU Lesser General Public License](#)(GNU LGPL)、[GNU Free Documentation License](#)(GNU FDL、またはGFDL)そして[GNU Affero General Public License](#)バージョン3(GNU AGPLv3)がある。

GNU General Public License



作者	フリーソフトウェア財団
バージョン	3
公開元	フリーソフトウェア財団 (Free Software Foundation, Inc.)
リリース日	2007年6月29日
DFSG との適合性	Yes ^[1]
フリーソフトウェア	Yes ^[2]
OSI の承認	Yes ^[3]
コピーレフト	Yes ^{[2][4]}
コピーフリー （ 英語版 ）	No ^[5]
異種ライセンスコードからのリンク	No（但し、GNU AGPLv3ソフトウェアをGNU GPLv3ソフトウェアとリンクすることは可能。詳しくは、セクション" 両立性とマルチライセンス "を参照せよ。）
ウェブサイト	www.gnu.org/licenses/gpl.html ^[8]

[テンプレートを表示](#)

GPLは、プログラム（日本国著作権法ではプログラムの著作物）の複製物を所持している者に対し、概ね以下のことを許諾するライセンスである。

- ①プログラムの実行
- ②プログラムの動作を調べ、それを改変すること
- ③複製物の再頒布
- ④プログラムを改良し、改良を公衆にリリースする権利

GPLは二次的著作物についても上記4点の権利を保護しようとする。この仕組みは**コピーレフト**と呼ばれ、**GPLでライセンスされた著作物は、その二次的著作物に関してもGPLでライセンスされなければならない。**

≡ CC BY-SA

MIT License

MIT License



この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。
出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。（2015年8月）

MIT License（エム・アイ・ティー ライセンス）は、**マサチューセッツ工科大学**を起源とする代表的な**ソフトウェアライセンス**である。**X11 License**または**X License**と表記されることもある。MIT Licenseは**GPL**などとは異なり、**コピーレフト**ではなく、**オープンソース**であるかないかにかかわらず再利用を認めている。**BSDライセンス**をベースに作成された**BSDスタイルのライセンス**の一つである。MIT Licenseは、数あるライセンスの中で非常に制限の緩いライセンスと言える。

X Window System (X11) などのソフトウェアに適用されている。また、2015年3月には、**GitHub**で最も使われているオープンソースライセンスはMIT Licenseであるという調査結果も出ている^[1]。

目次 [\[表示\]](#)

特徴 [\[編集\]](#)

要約すると、MIT Licenseとは次のようなライセンスである。

- このソフトウェアを誰でも無償で無制限に扱って良い。ただし、著作権表示および本許諾表示をソフトウェアのすべての複製または重要な部分に記載しなければならない。
- 作者または著作権者は、ソフトウェアに関してなんら責任を負わない。

MIT License

作者	マサチューセッツ工科大学
公開元	マサチューセッツ工科大学
リリース日	1980年代後半
DFSGとの適合性	あり
フリーソフトウェア	はい
OSIの承認	あり
GPLとの適合性	あり
コピーレフト	いいえ
コピーフリー <small>（英語版）</small>	はい

[テンプレートを表示](#)

MIT Licenseとは次のようなライセンスである。

- ①このソフトウェアを誰でも無償で無制限に扱って良い。ただし、著作権表示および本許諾表示をソフトウェアのすべての複製または重要な部分に記載しなければならない。
- ②作者または著作権者は、ソフトウェアに関してなんら責任を負わない。

≡ CC BY

WTFPL

WTFPL

WTFPL (Do What The Fuck You Want To Public License)とは、極めて緩やかなフリーソフトウェアライセンス (英語版) である。採用例は少ない。

目次 [非表示]

- 1 概要
- 2 条文
- 3 採用
- 4 脚注
- 5 関連項目
- 6 外部リンク

概要 [編集]

英語としても非常に下品な名称のライセンスで、あえて語感を尊重して翻訳するとすれば『どうとでも勝手にしやがれクソッタレ・公衆利用許諾(契約)書』といったところである。オリジナルのバージョン1.0は2000年3月にBanlu Kemiyatornにより作成され、Window Makerのアートワーク^[4]に採用されている^[5]。2004年にフランスのプログラマーで、後にDebianプロジェクトリーダーにも就任したサム・オセヴァール (英語版) はバージョン2.0を作成した^[6]。このライセンスは、ソフトウェアの再頒布と改変を任意のライセンスの条項で許諾する。ソフトウェアを受け取り本ライセンスに従うライセンシーには、「どうぞお好きなようにしやがれ」ということを促す。ほとんど悪ふざけのような名前の許諾書だが、ライセンスはフリーソフトウェア財団によりGPLと互換性のあるフリーソフトウェアライセンスとして承認されている^[1]。

Do What The Fuck You Want To Public License



作者	サム・オセヴァール (英語版)
バージョン	2
公開元	著作者と同じ
リリース日	2004年
DFSGとの適合性	Yes (パブリックドメインと同等)
フリーソフトウェア	Yes ^[1]
OSIの承認	No ^[2]
GPLとの適合性	Yes ^[1]
コピーレフト	No ^[1]
コピーフリー (英語版)	Yes ^[3]
異種ライセンスコード	Yes
からのリンク	

[テンプレートを表示](#)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/WTFPL>

WTFPL

どうとでも勝手にし
やがれクソツタレ・

公衆利用許諾(契約)書

The Unlicensed

The Unlicensed
= Public Domain

コピーレフト

コピーレフト



この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。
出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。（2015年8月）

コピーレフト（英: copyleft）とは、**著作権**（英: copyright）に対する考え方で、著作権を保持したまま、二次的著作物も含めて、すべての者が著作物を利用・再配布・改変できなければならないという考え方で、1984年に**フリーソフトウェア財団**を設立した**リチャード・ストールマン**が熱心に広めた考えである。**コンピュータプログラム**の特に**バイナリ**に変換されることを前提とした**ソースコード**についてのものであったが、その後、それ以外の著作物にも適用しようという動きがある（**クリエイティブ・コモンズ**など）。

しばしば、**GPL**や**GFDL**等（後述）の特定のライセンスを指すこともある。

目次 [表示]

概念 [編集]

コピーレフトの考えでは、**著作権者**はそのコピー（複製物）の受取人に対して撤回の出来ない**ライセンス**を認め、販売を含む再配布を許可し、**翻案**（改変）されることも可能とする必要がある。逆に、コピーレフトを利用する側では、このライセンスのものをコピーや変更、再配布する時にはこのライセンスをそのまま適用し、それを明確に示さなければならない。

コピーレフトの定義をまとめると次のようになる。

- 著作物の利用、コピー、再配布、翻案を制限しない
- 改変したもの（二次的著作物）の再配布を制限しない
- 二次的著作物の利用、コピー、再配布、翻案を制限してはならない
- コピー、再配布の際には、その後の利用と翻案に制限が無いよう、全ての情報を含める必要がある（ソフトウェアではソースコード含む）
- 翻案が制限されない反面、原著物の二次的著作物にも同一のコピーレフトのライセンスを適用し、これを明記しなければならない

コピーレフト以外にもフリーソフトウェアのライセンスは数多く存在し、**BSD**や**X Window System**などの、**オープンソースソフトウェア**で適用されているものがある。これらは二次的著作物へのライセンス適用や、使用可能なソースコードのコピーを義務づけていないため、コピーレフトではない。よく議論されることに、これらのライセンスとコピーレフトのどちらがより自由なライセンスであるのか？というものがある。これは視点の問題で、他のライセンスでは制作者など、現在のライセンス保持者の自由を最大限にしたもので、コピーレフトでは今後のライセンス保持者の自由を最大限にしたものだと考えることができる。



コピーレフトのシンボルとしてしばしば使われるアイコン。Cの文字が左右逆になっている。

リチャード・

ストーリーマン



Richard Stallman

リチャード・マシュー・ストールマン (Richard Matthew Stallman、1953年3月16日 -) は、アメリカ合衆国のプログラマー、フリーソフトウェア活動家。コピーレフトの強力な推進者として知られ、現在にいたるまでフリーソフトウェア運動において中心的な役割を果たしている。また、プログラマーとしても著名な存在であり、開発者としてその名を連ねるソフトウェアにはEmacsやGCCなどがある。なお、名前の頭文字を取ってRMS と表記されることもある。

photo by
Thesupermat, CC BY-SA 3.0

最初に行われたのは、明示的に著作権を放棄したり（パブリックドメイン）、放棄はしないが「誰でも自由に使って良い」と宣言したり、という形で共有する方法であった。

ところが、本当に誰でも自由に使えることにしてしまうと、共有・発展という作者の意図に反するような利用が行われることもある。パブリックドメインの状態にある著作物を改変した場合、二次的著作物はパブリックドメインになるわけではなく、改変者に著作権が帰属することになるためである。

このような問題をストールマンが経験した際に、コピーレフトという発想が生まれた。シンボリックス社から、ストールマンが作成したLISPインタプリタを使いたいと打診された際、ストールマンは彼の作品のパブリックドメイン版を提供した。シンボリックス社はそのプログラムを拡張して更に強力なものにした。そして、彼のもともとのプログラムに対して拡張した部分を見せてくれるよう求めた時に、シンボリックス社はそれを拒否した。これは法的にはどうすることもできなかった。

コピーレフト



クリエイティブ・コモンズ

#今週の課題

GitHubに新規リポジトリ
aboutcopyleft
というリポジトリを作り、

- **Apache License 2.0**
- **GNU General Public License v3.0**
- **MIT License**
- **WTFPL**

それぞれ**互換性**の特徴と、**コピーレフトとの関係性を図化**し
リポジトリトップにある README.md ファイルに、
その図を画像として埋め込み、リポジトリURLをTweetして
ください。その際、#AGU情報社会論 のハッシュタグを含め
てください。